

## 雅語俗録 : 伍

中野, 三敏

<https://doi.org/10.15017/4741897>

---

出版情報 : 雅俗. 5, pp.175-190, 1998-01-10. 雅俗の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 雅語俗録 伍

中野 三 敏

廿八 通俗唐鐘馗全伝

先日、さそわれて韓国へ訪書の旅をした。高麗大学では、いはゞ当然の事ながら、韓本と唐本の量に圧倒され、ソウル大では新築の奎章閣の書庫に、偉容としか形容出来ない韓本の集書に堪能し、又、旧京城帝大の書庫がそのまゝタイム・カプセルに封印されたような現場を目の前にして、「旧帝大文学部における藏書の性格と分類の実際について」という論文がたち所に書けそうな気分を味わった。更にソウルには例の憎い死番虫の奴がいらないという、極めて興味深い事実にも気がついた。ホコリは積つても、虫損を心配する必要がないというのは、九州のような高温多湿の地から見れば、まるで和本の天国である。すべからく和本の収蔵はソウルに於て行うべく、書庫を

建てるための二坪地主か三坪地主にでもなるべきか等本気で考えたくなる程ではあったが、とまれ、その折の所見の二三を。

「通俗鐘馗全伝」大本三卷四冊、天明五年序刊、菑園主人訳。紺色表紙、原題簽を欠く為、内題に従う。ソウル大図書館所見。

通俗モノは石崎氏以来、特に近年では讀本研究の盛り上りによつて博搜され尽したものと思っていたが、まだこんな物が隠れていた。

叙  
躍々<sup>フキタル</sup>兔<sup>ウサギ</sup>遇<sup>トキ</sup>犬<sup>イヌ</sup>獲<sup>トク</sup>之<sup>ノ</sup>金<sup>カネ</sup>鉄<sup>テツ</sup>之<sup>ノ</sup>剛<sup>コウ</sup>火<sup>ヒ</sup>能<sup>トク</sup>鏢<sup>カス</sup>之<sup>ノ</sup>物  
皆然也 此非<sup>ズ</sup>力<sup>ノ</sup>不<sup>ニ</sup>足<sup>ラ</sup> 不<sup>ル</sup>ノ可<sup>ク</sup>敵<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>自然也 是<sup>ヲ</sup>  
以<sup>テ</sup>彼<sup>ノ</sup>幽<sup>ク</sup>冥<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>惡<sup>ク</sup>鬼<sup>モ</sup>一<sup>ト</sup>遇<sup>フ</sup>鐘<sup>シヨウ</sup>馗<sup>クワイ</sup>則<sup>チ</sup>笠<sup>カサ</sup>所<sup>ニ</sup>覆<sup>フ</sup> 或<sup>ハ</sup>為<sup>ス</sup>  
手<sup>テ</sup>弄<sup>ト</sup>也 当<sup>テ</sup>是<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>也 虎<sup>コ</sup>ノ皮<sup>ノ</sup>犢<sup>ト</sup>鼻<sup>ハ</sup>忽<sup>チ</sup>為<sup>ス</sup>淚<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>霑<sup>ル</sup>  
千斤<sup>ノ</sup>鉄<sup>ノ</sup>杖<sup>モ</sup>更<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>地<sup>ノ</sup>舞<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>加<sup>フ</sup>之<sup>ノ</sup>画<sup>ヲ</sup>事<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>屏<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>旌<sup>ノ</sup>旗<sup>ニ</sup>  
而<sup>シテ</sup>遺<sup>ス</sup>辱<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>後<sup>ノ</sup>世<sup>ニ</sup> 嗚<sup>キ</sup>呼<sup>フ</sup>苛<sup>ク</sup>哉<sup>ト</sup> 鐘<sup>ノ</sup>馗<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>臣<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>罪<sup>ト</sup>無<sup>シ</sup>辜<sup>ト</sup>  
遇<sup>フ</sup>鬼<sup>ト</sup>如<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup> 童<sup>ノ</sup>子<sup>モ</sup>亦<sup>チ</sup>能<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup> 雖<sup>シ</sup>則<sup>チ</sup>知<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>未<sup>ダ</sup>  
知<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>由<sup>ト</sup>也 問<sup>フ</sup>幸<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup> 劉<sup>ノ</sup>叟<sup>ノ</sup>松<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>鐘<sup>ノ</sup>馗<sup>ノ</sup>全<sup>ノ</sup>伝<sup>ヲ</sup>也 沈<sup>ノ</sup>潜<sup>ニ</sup>  
反<sup>レ</sup>復<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>勝<sup>ニ</sup>捧<sup>ニ</sup>腹<sup>ニ</sup> 乃<sup>チ</sup>隨<sup>テ</sup>見<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>訳<sup>シ</sup>亨<sup>ト</sup> 書<sup>ヲ</sup>成<sup>テ</sup>授<sup>ク</sup>諸<sup>ヲ</sup>梓

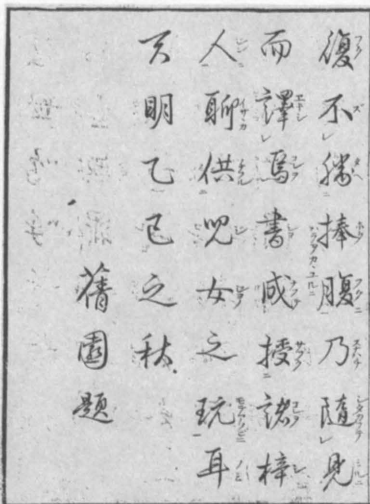
人<sup>ニ</sup> 聊<sup>カ</sup>供<sup>フル</sup> 兒女之玩<sup>ニ</sup> 耳<sup>一</sup>

天明乙巳之秋 蕉園題

乙巳は五年、蕉園の名は他にも見たように思うが、今  
思い出せない。江戸の人で国字解モノの著があったよう  
に思う。この本、国内では見たことがなかったが、板本  
ゆえ流石に「割印帳」には記載されて、天明七年三月の  
割印で「通俗唐鐘馗全伝」全四冊、墨付五十一丁。著者  
名は蕉園山人著と誤まるが、板元賣出しは前川六左エ門  
と明記される。冊数、墨付丁数も一致し、題は目録題と  
一致するので、ソウル大本には刊記・奥付を欠くものの、  
「割印帳」の記述がそれを補ってくれる。

巻頭目録には「第一回 鐘恵夫婦花園遊玩」から「第  
三十三回 簡擊五通」迄、章回小説の形で章題をたてる  
が、本文は「第十七回 秀英恋死」迄で四冊をおえ、以  
下は後編という事になる。鐘恵夫婦即ち鐘馗の父母に当  
り、第十六回は「前<sup>デ</sup>往<sup>テ</sup>終南<sup>ニ</sup>」の回で、御存知鐘馗が  
終南山に隠れる場面、次の十七回はその為郷里の恋人  
秀英がこがれ死し、発憤した鐘馗は見事二番目の成績で  
進士となるが、

通俗唐鐘馗全伝



唐王 鐘馗が形ノ醜ヲキラヒ玉フニヨリ 鐘馗モ亦仕  
 ンヲ求ズ 天帝ノ命ヲウケテ天下ノ妖魔ヲ平ゲ 冥  
 司ニユキテ善悪ヲ差別シ 一百六地獄ヲメグリテ鬼ヲ  
 奴ノ如ニシタルニヨリ 人ミナ鐘馗ヲ画ニ鬼ヲ側ニカ  
 キ添ルナリ 未ダ知ラズ下回ヲキイテ分解セヨ  
 で終る。十七回以降はその地獄廻りを趣向するものだが、  
 刊行された形跡はない。劉叟松の「鐘馗全伝」について  
 は全く知らない。

廿九 豊芥子の報條

ソウル大本からもう一つ。題簽には「名譽のひきふだ」とある半紙本写本一冊。その通り諸家の報條の写しで、類書は多いが総数六十篇という分量では他を圧している。

内訳は、

- 馬琴 一、三馬 三、京伝 九、種彦 七、焉馬 三、
- 一九 二、春水 二、眞顔 一、京山 一、種員 五、
- 文京 二、仙果 一、有人 一、其水 二、三孝 一、
- 如阜 一、金水 一、銀鷄 一、英泉 一、香雪 一、

西馬 一、魯文 八、豊芥子一、風来 二、  
 といった所。風来、京伝、焉馬、三馬などの大物は、それぞれ「六部集」「ひろふ神」「狂言綺語」などから抜いただけだが、珍らしい所では豊芥子辺りか。

長唄  
 御三味線糸所  
 豊後 遊らくや

うち粉	はち
いと	こま
はち皮	ねを
とうかけ	こまとめ

乍憚口上書を以て御披露奉申上候

豊芥子述

抑三味線の起原は永禄年中琉球国より伝来せしといふ事は、不申とも各々様方能御存じのことなれば爰に略し、如斯泰平の御代の楽器には是に過たる物あらし、

十二律四季の調子も夫々に、春は花により秋は月にかこつけ、或ひは雨雲のつれくにも、此三筋の糸の音色により、心うきたつ樂は、外に又なき翫樂と、好の道より思ひ付、此度三絃の、糸より細き世わたりを相始め、品々吟味仕り、トツチリトンと仕入いたし、箱入または小賣にも、宿糸は更に差上げず、扱二上りの上調子、高音は「高値」に響あれど、値段はグツト三下り「目利安」うりに「根緒」引下ゲ「筒掛」値なし、利合の所は「ハツ乳」の皮の薄くとも、「糸械」をこなすが第一と、申すが若しや空言ならば、「転軫」様よりどのやうに、御「撥」の当るも不知、私も御当所にて生立、また「乳脹」の幼少より「塞尻」のしりをすゑ、常盤津の松の齡を重ね、富本清元の聲曲、あらたに開く梅園の一トふしも、流れ尽せぬ「海老尾」の腰の曲るまで、御馴染の御得意様方、御蟲眞強きに心もいさみ、「駒」の足なり早々と、多少に不限聊なりとも、御用向被仰付候は、チリツンでのおつから、行末は「糸」藏を建つらね度、御取建と思召し、御風聴被下、見世開き当日より御「弾」連て、永当く御

光来の程偏にく奉希上候、主に替りて恐身くあまつて

豊芥子戯述

呉服橋御門外 美しま屋敷

遊樂屋歌正

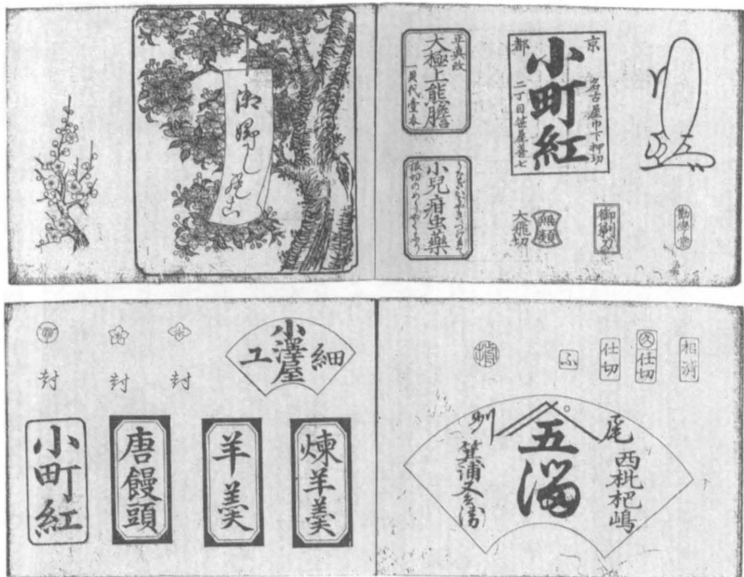
美しま屋敷は三島自寛の後裔か、無論遊樂屋はその店借り人というに過ぎまいが。

卅 仕切判印鑑帳

国会図書館に「板木屋印譜」と仮題した横本二冊があつて、その題名は以前から気になつていた。中身を見ると俳諧の点印や景物表、葉種や菓子商標、社寺の守札や、米屋・醬油屋など商店の屋号や請取印などを朱・墨とりませて多数押捺した、いはゞ、多様な印版の見本帳の如きものといえよかろうか。収載される印面からみて、明らかに名古屋を中心とした、幕末のものとはしれるものの、その正式の氏素姓や原題といったものが、もう一つ窺い知り得なかつたが、今度の韓国行きで、何

とか見当がついたのは、人蔘の功德とでも言うべきか。  
 ソウル中央図書館蔵「仕切判印鑑帳」横本一冊。背は  
 革製、平は布製で、背にはマウントを四本置き、上部に  
 横に「仕切判／印鑑帳」と三行、下部に同じく「西海堂／  
 藤樹」と二行、何れも金文字が入れてあり、本文は薄手  
 の奉書紙を百丁ほど綴じて、中身は前記の国会本と全  
 く同類のもの。此方は大阪中心におゝかた西国筋の凡て  
 に及び、中には官庁や銀行の用印もある。つまるところ、近  
 代の活版印刷屋の活字見本帳に先駆けた大阪の印版屋の  
 見本帳なのであった。恐らく江戸期から大手の印版屋、  
 即ち板木屋では、皆こうした見本帳を手元に備えて、注  
 文に応じていたものであつたらう。国会本は明らかにそ  
 の江戸期のものである。わかつてみればいかにもという  
 ばかりだが、これ迄殆んど類本を見かけることがなかつ  
 たのは、やはり残るものが少なかつたからには違いない。  
 珍本と称して良からう。

国会本「板木屋印譜」



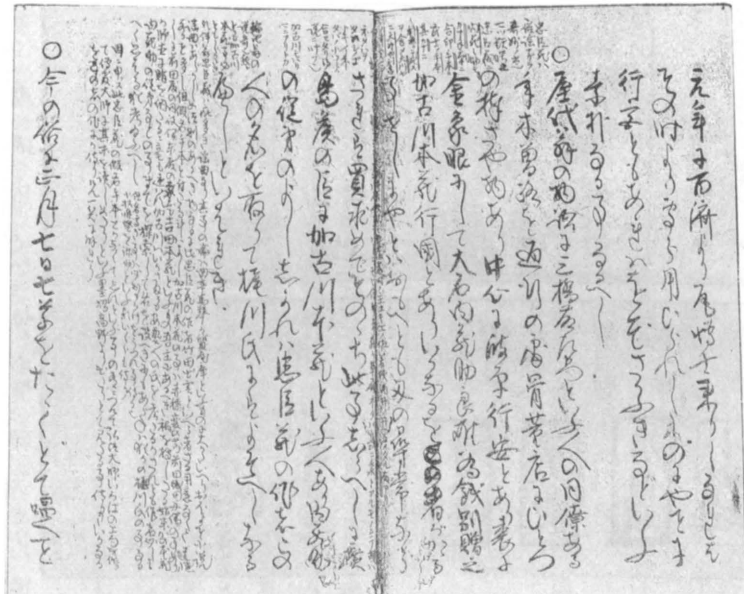
世一 直養漫筆の序

西田直養には「笹舎漫筆」とは別に「直養漫筆」と名づけるものもあり、極く若い時からいろ／＼と書き溜めたものを、最後に取捨編纂したものが「笹舎漫筆」二十巻となつたものらしい。ソウル中央図書館蔵の写本「直養漫筆」二冊は、そのかなり早い時期に直養の手にあつた事が確実な一本である。

外題は表紙左肩に「直養漫筆前編上(下)」と墨書されるので、なお後編も作られたものらしい。一丁分の自序があつて成立の事情を何がしか明らかにしているのので左に記す。

此書はおのれ二十ばかりの昔よりの随筆なりもと反故のうらにかきつけたりしをこたひ松尾直与にかくはかきあらためさするになん考得たりとおもふ事はまれにておほくは杜撰かちなれとうみの子のつき／＼に日をもなしうけさらしをしめさむとおもふのみ也いにし頃学の友たちといひあはせ嚶々筆話といふもの梓にちりはめし時もやかて此漫筆の中よりひろひ出しし也いま

直養漫筆



よりのちかの筆話の三編をもものさむ時はまた此中よりとりいたすへしさて心あらん人たちの披き見たらましかは皆手ちかき事ともにて爪はちきしてわらはるへしたゝ群居終日之義におよはすあたり日をおくりくらさむあたならざるまでなりかし 天保十四年癸卯秋八月三日さゝのやの主人筆を柳の馬場の館にとる

天保十四年は直養五一歳、松尾直与は筱舎の門人の一人であらうが未詳。

全百六十五条の本文は、多少の出入りはあるが、おゝむね隨筆大成本「筱舎漫筆」の卷三から卷六辺りにおさまる。但し共通の条でも見出し題の変改や、本文の異同が目立つ。序文にいう「嚶々筆話」は、これも既に隨筆大成・卷五に翻印されるが、野々口隆正編になる直養・信友・諸平・内遠・春郷ら十二人の学友の考証隨筆を集めたもので、初篇一冊は天保十三年正月、二篇一冊は同年六月の刊。直養の文は初篇に五章、二篇に二章が採られており、何れもこの「直養漫筆」に入るものであるのは序文にいう通りである。

本文は直養自筆ではないので、序にいう所の松尾直与の筆だらうが、上巻末には、

人して写さしめぬれば誤いとおほし 見ん人ゆるし給へ 直養

と、これは紛れもなく直養の手で識され、下巻末にも同様の識語があつて、その後、

#### 拙著目

- |        |    |         |    |
|--------|----|---------|----|
| 一 金石年表 | 板完 | 一 根元考   | 完  |
| 一 筱舎集  | 三冊 | 一 直養漫筆  | 二冊 |
| 一 北野茶記 | 完  | 一 古典文粹  | 完  |
| 一 神墾考  | 完  | 一 四天王寺考 | 完  |

とあつて、更にその後、

西田氏所著直養漫筆二冊自加裝幀幀  
大正十四年乙丑九月中浣 若樹生

の識語があるので、その伝来は明らかである。小倉の縁で林若樹の求める所となり、若樹文庫賣立ての際、海峡を渡つたものであらう。尚上下巻共に、巻末には岡熊臣、石河正養、福場広洸の三氏の署名が連書されており、岡・石河は何れも津和野藩養老館の和学教授をつとめる者、



さすれば福場氏も恐らく津和野藩士で後の福羽美静か、

その父美質の何れかであろう。本文中にはこの三氏の他、

信友・広道等の注記や評語が多く写し入れられており、

それらは大成本「笹舎漫筆」には見えぬものが多いのも

興味をひかれる。

### 廿二 直養隨筆統紹

直養ついでに、かつて矚目のもののノートあり、こゝに記す。

大本一冊、茶表紙、左肩に「干役聞見録 天保四年之作」と墨書。但し内容は「目さまし草」と「海上篇」と内題した、若干大きさも違う二種の稿本を合綴したもので、「西田文庫」の蔵書印もあり、何れも紛れもない直養自筆のもの。表紙の題は「海上篇」の内容にふさわしく、ある時点で「目さまし草」を合綴したものと思う。

「目さまし草」は巻頭内題下に「ササ庵主録」、尾題下には「此筆記ハ天保二年辛卯歳ニカケルナリ、廿九才、元メ役中ノ隨筆ナリ」とあって、墨付三十五丁、全九十

### 直養自筆「海上篇」



六項ほどの漫録。内容は大成本「篠舎漫筆」と重なるものが多く、各項の上には墨筆による圈点や、朱筆による△や数字の書き入れが散在し、この草稿から更に書き抜いたり、前後撮り合わせたりして、「篠舎漫筆」の定稿を仕上げたものであらうことが容易に推測される。即ち前掲のソウル中央図書館本「直養漫筆」のもう一つ前段階の草稿の一部といふべきものか。本稿が天保二年に成り、「直養漫筆」が同十四年、そしてその後、現在の二十卷本「篠舎漫筆」となったものと思う。内容の大半は「漫筆」と重なるが、見えぬものもまゝある。

○正直といふことシヨウジキにふたつあり 正直といへはすこしはおろかにみえ 正直といふ時は潔白にしてをくみゆる也

○男女の陰の名、古事記になりくゝてなりあはさる所、なりあまれる所、日本紀にをの神めの神などあるは、すへて理りもていひたるにて、さたまりたる名にあらず 和名抄に男陰をへのこ 女陰をつびとあるそ 體語の初りなるへしとおもひしに 靈異記に閑養とあり〔て、いまいふまらてふ名も 千年のをちより

いひこしものなりかし ぼゝといふ詞はいまたみあたらず ことは記紀などにはどとあるをやがて訛りて ぼゞとはいへるにか〕宇治拾遺に松たけのこときも の またかのもの、又脳乱などあれと すへて形容せるものなり 鈔チョウに吉吉とありて玉門の頭にいでたり 和名ヒナサキとあり、こはいかなるものにか 〔いはゆるつびなるさねてふものにか いまた考へず〕

「海上篇」は墨付二十五丁。末尾に、

こは天保四年九月十三日舟にのり 同十四日赤馬か 関にかゝりしよりこのかた 十一月廿九日品川にいたるまでの筆記なり 大江戸にての事はまた別にものすへし 旅中なれば草稿のまゝにて、たゞ筆にまかせてしるしたれば ひとつすちおなし事とも打ましりて いともくゝ みたりかはしければ 人に示すへき物に非ず ましておのか遊興のことやまた 公の嫌疑にふるゝ事もあまたあれば 実に帳中の秘

書とやいふへからむ

天保四年十二月朔日 西田直義筆を神門邸舎なる  
僑居にとる 干時歳四十一天保五年三月添削シテ

一本浄書ス 此稿ハ人ニ不可示(花押)

又、最終丁裏見返しには、

此目不醉草 東行筆記ノ二書ハ 余壯年ノ作ナレハ

意氣慷慨ノ論説アリテ 今ニオモヘハ熱中ニ堪ヘ

サル「多カラストセス 今茲會之ヲ敗籠中ニ得 合

テ一冊トス 居諸荏苒已二十年ノ昔トナル 今ヤ衰

老日ニセマリ 此二書ヲ見ルニ他手ニ出ルカ如シ

天保十三年十月廿一日采筆于京師柳巷邸舎

鎮ニ  
能養

と、二書合綴の由来を述べる識語もある。

「海上篇」別名「干役聞見録」「東行筆記」は、識語

にいふ通り、天保四年の江戸祇役に際し、その途次の囑

目を何くれとなく書留めたものをいふが、中でも大坂は

十月廿二日着以来、十一月十五日に淀舟に乗る迄、殆ど

一ト月半の滞在で頗る記事に富み、その抜書のみでも極

めて面白いものになりそうだが、別の機会にして、その

内の二、三のみ。

一、十月二日、平野屋一統へ手ヅマヲ振舞フ、春吉ト

云至テ上手ナリ、芸子四人、嘶方太鼓持五人出ル

何レモ芸者ナリ 其内福介、萬八ト云二人殊ニ妙手

也 彦・平・安三人来会ス 春吉第一ノ芸ハ長持拔

也 長持ニ入テ外ヨリ錠ヲオロシ 封ヲカク 屏風

ヲ引廻シ烟草二三フクノ間ニテ屏風ヲ取レハ 長持

ノ上ニ座タリ 不思議ナリ 跡ニテ於岩方幽霊ト云

「アリ 坐中火ヲ消シ 灯燈ヲ青キ火ニテトボス

其時間内頻リニ鳴動ス 幽霊ノ声色ニテホノ暗キ処

ニ出ル 勿論人形ナリ 黒髪ヲ打サバキ 白衣裾細

ニテ面ハ白青、疊ヨリ三尺斗リニ出テ 天井トツカ

ユル程立上ルナリ 糸ニテツリテ上下サスルナリ

芸子ノ属ヒ仰天肝ヲ消シ 狼籍ノ体一興ナリ 暗キ

時冠綏ヲヒクノ興モアルヘシ、河久宅ナリ

一、鴻池 加島屋此両家ハ旧ニ倍ス 平五モ旧ニ倍ス

食野ハ家産ヲ失フ 天王寺屋五兵衛モ近年衰フト云

一、濱方ニテ播仁至テ勃起ス 堂島数万家ノ金ト仁兵

衛一人 肩ヲ比スルヨシ

一、高池栄次郎来話 此人未タ年若シト雖文筆アリ

卅三 京伝手紙 季鷹宛

兼葭堂ノ事 竹山兄弟ノ跡ナト聞タリシニ、能事理  
ヲ弁ス 今ノ中井ハ篤実ノ人物ニテ、頼、茶山ノ風  
ナシ、依テ名発セズ 道学家ノ由、篠崎氏今ノ主人

めつらしく尊書被下  
拜見仕候 如仰三ツ昔シ

ヲ小竹ト云 是ハ風流アリテ詩文ノ名高シ サレト  
モ京師諸名家ノ比ニ非ス 文筆雅事共ニ地ヲ払テナ

拜顔不仕候得共 益

シト云ヘリ、契沖・尾崎・中井二子等ノ後 廖々タ

御壯健御座被遊 恭悦

ル「歎ヘシ」〔余、歌ヨム事ヲ知テ短冊ヲ乞片書ヲ

奉存候 然者玉詠并ニ

示ス 余和漢古今ノ談話ヲセシニ博覧多通ノヤウニ

御筆養老御扇子御めくみ被下

思ヒ、至テ余ヲ尊信ス」

千善万悦難謝尽奉存候

一、当地ノ豪家ノ美事ハ 家産漸々ニ衰ントスル時、

去年六十御賀御祝

無用ノ道具ヲハセリニ出シテ公然ト之ヲ賣リ 店ヲ

被遊候よし千状万歳

疊ミ 質素ニシテ誠ニ窮乏ヲ世間ニ示シ 毫モ恥ル

目出度御□奉存候

「ナシ 因テ年数ヲ運ヒ恢復ノ事多シ 上ノ身代下

欲全百年寿と申御題

ニ不落シテ中ニテ踏留ルナリ、吾小倉ノ風モカクア

めつらしく奉存候 百年は

リタシ 負惜ミノ弊至テ悪シ

申ニ不及 千万年もとなほ奉祝

等。この時の直養の大坂滞留は、藩用の金策であつたよ

御丈夫ニ御長命ヲいのり候て

うだ。

お齡は千代ニ

八千代を

あられ餅の

いはほとなれと

お歯に

あふまで

御耳の少し遠きも

かへりてよろしかるへし

鶯のほととぎすのと

めんとうな浮世をきかぬ

みとつくそよき

浮世のことをといひたけれと心アマリテ

文字たらず

御一笑被遊可被下候

且又拙筆一二枚

奉差上候 みとつくのあふき

これも一握さし上候 老衰仕

手もかしけ かねて拙筆の

うへなほ更ニ見くるしく御座候

心に□□ほど

筆にかきとりかたく

殊に月廻 何やかやといそかはしく

申上残し候

頓首々々 拜

京伝

十二月十五日

加茂大人

右は昔々、藤園堂の店先にて仕入れ物を盗み読みしたもの、今はどなたの文蔵に収まっているものやら。懐紙二ツ折に認められる。空白ヶ所は藤園堂主人と額を寄せて苦心のあげく、結局よめず、それも今はなつかしい想い出である。

季鷹の還暦賀宴は文化十年九月十六日に円山の端寮で行なわれたゆえ、本書簡は文化十一年京伝五十四才の師走の筆としれる。

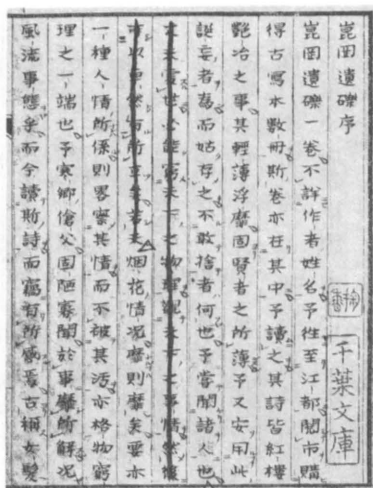
還暦の諸家賀詠は、十一年三月、半紙本一冊「季鷹縣主六十賀宴歌」の題で刊行されるが、その巻頭に「欲全百年寿」の賀題が置かれている。

世四 崑岡遺磔

この所、竹枝への言及が目につくのは、太平の兆か乱世の朕か、何れにせよ文運隆盛のあかしとでも言えば言えよう。その尻馬に乗ってみる。

「崑岡遺磔」と題する写本一冊、大本墨付僅か七丁。

「千葉文庫」「掬香」の蔵印あつて伝来は知り得るが、作者は詳ではない。天保壬寅（十三年）三月天外仙史秦孝繁と署名する序あり「崑岡遺磔一卷不詳作者姓名」



予往至江都一閱市購得古写本数冊一斯卷亦在其中——と記すが、恐らくこの天外仙史即作者と考えてよからう。七絶三十首、即ち河・柏・池三家の吉原詩を集めて一書となした「崑岡餘余」一冊（宮沢雲山編、文政九年序刊）と、阿部樸斎著の「続々吉原詩」一冊（天保五年刊）を継いで、三続吉原詩を企てたものといふ。

「壬寅季春 緑川外史書」とした後序一則があり 中に河・柏・池詩及び続との諸詠に関する品隲の言あつて、当代人の評語として面白いので、本編は何れ「銚子竹枝詩」など未翻印のものとして纏めて太平書屋主人の手をわすらわす事にでもして、とりあえずは後序の一部分を引いておこう。

四家（河・柏・池・及び町菴氏）風裁、後先輝映、未タ知ラ孰勝、而紀述之間、猶有可レ評ス者、夫均シク是烟花女郎也、而其間品格相去不啻霄壤也。娼家其上者曰総籬、又名大衙、次曰半籬、又名雑衙、次曰惣半籬、又名小衙、而東西河岸、小格截舗、是為下矣。三衙麗品、

書三<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>最<sup>ト</sup>、而次<sup>ク</sup>之<sup>ニ</sup>者、衙妓以下、又各有<sup>レ</sup>等、其品格既不<sup>レ</sup>俾<sup>カラ</sup>、則其情狀亦隨<sup>テ</sup>異<sup>ニス</sup>趣<sup>ヲ</sup>、若<sup>キハ</sup>夫<sup>ノ</sup>書三名姝、韻擬<sup>シ</sup>宮嬪<sup>ニ</sup>、麗比<sup>シ</sup>富姬<sup>ニ</sup>、牟采明艷、態度嫺雅、望<sup>テ</sup>為<sup>カ</sup>神仙中<sup>ノ</sup>想<sup>上</sup>、則其情況、自不<sup>ニ</sup>與<sup>レ</sup>他同<sup>カラ</sup>、而能伝<sup>ル</sup>其神<sup>ヲ</sup>者、唯寬齋河氏、獨得<sup>タリ</sup>之<sup>ニ</sup>矣、池氏次<sup>ク</sup>之<sup>ニ</sup>、猶<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>影響<sup>ノ</sup>、柏氏所作、言<sup>ハ</sup>衙妓<sup>ヲ</sup>則有<sup>テ</sup>餘<sup>ハ</sup>、而言<sup>ハ</sup>書三<sup>ヲ</sup>則不<sup>レ</sup>足<sup>ラ</sup>要踐履<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>関<sup>ル</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>掩<sup>フ</sup>也、獨統統諸詩、名物事件、間<sup>マ</sup>係<sup>ニ</sup>北里<sup>一</sup>、而說<sup>ク</sup>情態<sup>ヲ</sup>處殊卑<sup>ニ</sup>一格、要<sup>ハ</sup>根津音羽之竹枝<sup>ナル</sup>耳。視<sup>ル</sup>之<sup>ニ</sup>題面<sup>一</sup>、未<sup>ニ</sup>必<sup>シ</sup>稱<sup>ハ</sup>也、此編作者其<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>懲<sup>ル</sup>於此<sup>ニ</sup>欤、所言皆不<sup>レ</sup>出<sup>テ</sup>於五街三衙之外<sup>ニ</sup>、其<sup>レ</sup>猶在<sup>ニ</sup>於池柏之間<sup>ニ</sup>乎

と。必ずしも如亭を褒めぬ辺り、又一見識とすべき所もあるように思う。

世五 活字版太平御覽印刷之大意

和刻本「太平御覽」一千卷百五十三冊は、幕府医学館教諭喜多村直寛が、その家塾学訓堂から印行したものだ

活字版宋槧太平御覽印刷ノ大意

一 太平御覽一千卷目錄十五卷ハ有宋一代ノ盛典ニシテ古今ノ佚書多ク此中ニ收載シテハ儒家醫家ヲ論ゼズ凡考據ノ學ニ志アルモノ坐右ニ一本ヲ置カズンバ有ルベカラズ然ルニ世間ニ刻本少ク且巻帙浩大ナレバ謄抄モ又安カラズ況明人ノ刻本活字版等アレハ文字正シカラス近時清人ノ做宋本アリ此又舶載多カラズ今我邦ニ傳ル所ハ金澤文庫ノ舊藏ニシテ此本ノ精核ナル如キモノアラ

一 學訓堂

ズ因テ博ク世ニ傳布メ學者ノ稽古ヲ資ケントス此活字印刷ノ第一義ナリ

一 予嘗活字ヲ以朝鮮國醫方類聚二百六十六卷ヲ影印ス今其半ヲ成スニ至レリ其活字ノ式ハ武英殿聚珍版ニ本ツキ且本邦近人ノ製ニ働ヒ更ニ工夫ヲ加テ最捷便ノ法トセリ然レ類聚ハ浩博ナリト雖凡醫家ノ書ナレバ字數多カラズ且創意ニ出シレバ其字于甚簡便ナラス因テ今御覽ヲ刻スルニハ清人ノ做宋本ヲ剪裁ノ粉本トナシ本邦傳來ノ宋槧ニ

摺テ刷印スル時ハ數十萬ノ字子ヲ得ヘシサ  
レバ萬卷千帙ヲ逡巡嚼蹙ニ辨スベキナリ此  
活字彫印ノ因テ起ル所ナリ

一御覽成ルノ後ハ徒ニ字子ヲ載スルモ益ナシ  
サレバ古今ノ載籍宋元版ノ世ニ乏キ書或巻  
帙浩博ニ速録刻スルヲ能ザルモノ或本  
邦先輩ノ著書多ク傳ハラザル類ハ其人ノ請  
ヒニ因テ刷印スベシ

一書籍ヲ彫印スルヲ邦禁アリ故何人ノ書ヲ  
論ゼズ官允ニ非ザルモノハ印刷シ難シ如

二一學訓堂

聚珍版

茲ニ告グ

一此舉ハ前條ニ述タル趣意ナレバ敢テ名ヲ荷  
ヒ利ヲ鬻クノ類ニ非ス然レモ巻帙夥多ナレ  
バ費用モ亦少カラズ因テ今御覽一帙ノ價ヲ  
十二圓三方ト定ム目錄ヲ一帙トシ本文廿卷  
ヲ以一帙トメ一帙成ル毎ニ請人ニ贈ルベシ  
其時ニ金一方ヲ投セラルベシ歲月ヲ積テ書  
金ノ數五ニ兩全スルナリ若同志ノ士五六部  
ヲ引受テ懇友知己ハ懇僊シクランニハ活字  
ノ書ヲ以テ其周旋ノ勞ニ報ヘシ此又予一片

婆心ノ所存ナリ

一新舉ハ多ク字子ヲ蓄テ後帙ヲ刻スルヲ要  
トス散テ財利ヲ射ルヲ欲セズ然レ浩漠ノ  
書ヲ印シ數萬ノ字子ヲ刻スルヲナレバ一已  
ノ力ニ辨ズベキニ非ズ因テ普ク予ガ意趣ヲ  
告テ同人ノ力ヲ贊テ其事ヲ成サンヲ希フノ  
ミ

安政乙卯六月

喜多村直寛識

二一學訓堂

が、活字の美しさと印刷の精巧さと、質量ともに本邦木  
活字版の白眉と称して差支えない出来栄えを示している。  
その伝来の内、現東京大学南藝文庫蔵本は小中村清矩旧  
蔵の一本で、二丁半のコヨリ綴じに、表紙に「活字版宋  
槧太平御覽印刷之大意」と刷り、柱には「學訓堂／聚珍  
版」と刷り込んだ、これ又本文と同活字による別冊が附  
される旨、畏友キャンベル君の通報を得た。他では見た  
ことがないので、竊來のコピーをそのままこゝに影印で  
示すことにする。



安政乙卯は同二年、そして本文末尾の直寛自跋は文久元年に記されるので、その間八年をかけたの大出版であった。右の自跋は森潤三郎稿、「江戸時代後期に於ける木活字による三大出版」に全文が引かれる。又、福井保著「江戸幕府刊行物」に引かれる医学館の記録「医学館帳」によれば、直寛は文久二年三月に木活字九万余個と印刷道具一式とを医学館に献納した旨が記されるという。医学館の以後の印刷に供されたに違いないが、その前にも、同活字で作られた学訓堂聚珍版は、十点ほどにも及んでおり、直寛の志は十分に果たされている。